

戦後日本の知識人論と「進歩的文化人」批判

塩原, 光
九州大学大学院地球社会統合科学府

<https://doi.org/10.15017/1912812>

出版情報 : 地球社会統合科学研究. 8, pp.43-55, 2018-03-01. Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

戦後日本の知識人論と「進歩的文化人」批判

シオ
塩 原

ヒカル
光

はじめに

近年の戦後日本思想史研究においては、知識人と民衆（大衆）の関係をめぐって、丸山眞男（1914-1996）、鶴見俊輔（1922-2015）等戦後の知識人の民衆（大衆）観の変遷に注目する試みがなされている¹。しかし、戦後日本の文脈で流布され、論壇の一潮流をなしていた「知識人」論あるいは「知識階級」、「インテリ」、「インテリゲンチヤ」、「文化人」論の中で彼らが展開した、知識人をめぐる問いや運動の中での模索についてはさらなる検討の余地がある。職業的に規定された学者、専門家、研究者、評論家、ジャーナリストとは区別された、知識人であることの意義とその知性の役割は戦後日本という文脈の中でいかに構想されてきたか。本稿は丸山眞男と鶴見俊輔の議論に焦点を絞る中で明らかにしていく²。

戦後日本の知識人をめぐる問題に注目するとき、重要となる論点は1950年代の半ばに生じたマルクス主義の権威の変動との関係である。例えば竹内洋の『革新幻想の戦後史』では、1955年と1956年を境にマルクス主義の権威が衰退し始めた（日本共産党第六回全国協議会での「極左冒険主義」批判と、ソ連共産党大会における「スターリン批判」）一方で、社会党左派や共産党の同伴者とみなされていた知識人にとって、「共産党という中心なしに進歩的文化人や進歩的インテリそれ自体の正統性を保証する圏域が創出」されたと論じられている³。さらに共産党という中心なしに六〇年安保闘争において活躍した、進歩的文化人の象徴としては丸山眞男が挙げられ、「六〇年安保闘争は、党による正当化を必要としない「本来の知識人」=進歩的文化人が市民主義・市民運動の旗振り役をすることでもっとも輝いたとき」とされる。六〇年安保闘争期に、市民主義と市民運動の足場を得た知識人は、革新政党的命令によらず、自発的に「行動する知識人」への変身を遂げることができたという説明もなされている⁴。

戦後日本のマルクス主義の権威を揺るがす重要な事件が1950年代半ばに起きたということは事実にはちがいないが、「進歩派」と見なされた知識人たちにとって、共

産党や社会党左派によるマルクス主義の権威の衰退が契機となって、党に依拠しない本来の知識人の正統性を保証する圏域が生まれたとすることには疑問が残る。進歩的文化人と呼称されつつも、マルクス主義からは距離を置く立場から平和運動に参加した知識人たちは、マルクス主義の権威の衰退を待つまでもなく、脈々と知識人論を展開し「本来の知識人」の姿を模索していたことに着目したい。とりわけ重要だったのは、マルクス主義の階級闘争的な運動ではない、民衆（大衆）との関係の模索と、知識人の戦争責任、「進歩的文化人」批判をめぐる問いであった。これら複数の問いについて、特に占領期後半から1950年代半ばにかけての知識人論と彼らの模索を読み取りながら検討していく。

1. 知識人は無力か

終戦直後から論じられてきた戦後の知識人論は、講和条約締結の是非をめぐる平和運動の中で、「進歩的」な知識階級、知識人、インテリゲンチヤ、インテリ、文化人⁵を無力とみなす論調に対応を迫られていた。

1949年1月に平和問題談話会が「戦争と平和に関する日本の科学者の声明」と、1950年1月に「講和問題についての平和問題談話会声明」を発表すると、「現実の国際情勢を知らぬ迂遠な空論にすぎないだろうか」（「あえて「理想」を訴う——“民衆の運命をあしらうな”『日本読書新聞』19500215⁶）という疑問が紹介されたり、「学者グループは全面講和を希望する」といっただけとされているが、現実にはできそうもないことをたゞ「希望」しているだけでは絵に描いたモチをみてヨダレを流すようなナンセンスだ」という批判が生じていた（『読売新聞』19500605）。

「理想」に対する冷笑的な論調には中野好夫が1951年12月の『改造』誌上で反論を執筆し、「無軍備、非武装をもって、現実遊離の妄想だということに対して、「今日の空想が予想以上に驚くべき速さをもって実現に達しうる現実の可能性というものを考える時は、むしろ逆に、戦争反対、軍備否定こそ、かえって最も現実的思考

でなければならない」と述べ、原爆、毒ガスの大量殺戮兵器の使用可能性を念頭におきつつ、「現在日本の再軍備論者は、このような未来戦争の規模と可能的現実とを覚悟」できていないと主張した。「いかにして世界をこの危機から救うかについて、世界の良心〔…〕と協力することも、最も現実的な問題でなければならない」。「今や知識人よ、空論を叫べ、理想を言え」と強調した（中野好夫「知識人の立場」『改造』195112）。

しかし、こうした知識人の「理想」や「空論」への批判は続いていく。『群像』1952年5月号では、特集「日本のインテリゲンチヤは無力か」が組まれた。なかの・しげはるは、「インテリ」がいくら平和を要求してもどンドン国が戦争方向へ持って行かれる、いくら憲法をまもろうとしてもどしどし憲法改悪の風向きが強くなる。結局のところ「インテリ」がいくら叫んでも実力にはかなわぬのではないかという意見がぼつぼつあらわれてきた。つまり「インテリ」無力論である」と説明する。桑原武夫は日本のインテリを「大学出身者」と規定した上で、インテリが無力である理由として、「蓄積した知識が現実の生活に結びついていない」弱さがあり、民衆にわかる文章が書けず、民衆に支えられない弱さを挙げている。

講和問題をめぐる学者の平和論に対する冷笑的な論調は、1952年の時点では平和問題に取り組むインテリゲンチヤ、知識階級、知識人の無力論として論じられていた。こうした論調を準備した前史として、1948年、1949年頃の知識人論を振り返る中で、知識人の弱点や無力に対していかなる応答がなされてきたかを確認する。

南博「主体性論より実践面へ——知識階級論の再展開」によれば、この時期に「知識人の問題は、今やその主体性についてのあげつらいからもっと具体的な知識人間の共同戦線、更に彼らをも含む廣はん民主戦線の結成という実践の面に」移行していた。占領政策の転換という危機に対処するために、知識人論は「社会党、共産党の統一戦線」によって、「無党無派の知識人を社会主義へ接近させる」こと、という実践的な課題に対応しなければならなかった（『日本読書新聞』19480714）。

南が主体性についてのあげつらいと指摘したのは、マルクス主義者と近代主義的な知識人との間で交わされた知識人論の中心的な論点を指す。人民大衆の立場を離れた知識階級にのみ通用する道徳論を排除し、歴史的現実拘束された階級闘争の理論から知識層の政治行動は生まれるとするマルクス主義の立場（蔵原惟人「文化革命と知識層の任務」『世界』194706）に対抗して、『近代文学』同人の荒正人は、人間独自の価値領域、「ヒューマニズム」によって知識人の行動を生む、知識人の主体性を主

張した（荒正人「現代インテリゲンチヤ論」『文化評論』194807、「主體的知識人」『近代文学』194809）。

問題の中核は蔵原惟人によれば「一応近代的な教養を身につけていて、内心ファシズムと戦争に反対していた進歩的知識人がそれと戦うことが出来なかった」こと、「その最も重要なものは日本の知識層が人民大衆から孤立していて、大衆の支持を得られなかったこと」であった（「文化革命と知識層の任務」『世界』194706）。人民大衆との結合という階級闘争戦略によって戦前・戦中のような人民大衆からの孤立を防ぎながらも、特権意識を否定した階級移行ではなく知識人独自の主体性をいかに承認し得るか、という問題が戦後知識人論の出発点を成した論点であった。

また1948年頃には既に、終戦直後から続けられてきた地方での啓蒙運動の反省が提出されていた。静岡の庶民大学三島教室の中心にいた木部達二は「地方文化というと、中央から知識をとり入れ」という考え方が、「文化人一般」にあったこと、「アカデミイという組織の中で働いていて、「理論」や、「抽象的な民主主義の概念」ではなく、「民衆のなまなましい生活、民衆の組織的な活動のなかから」、既成の理論や学問に代わる「新しい言葉」を発見するべきと主張していた（座談会「意識革命と文化運動——地方の現状を基盤として」『光 CLARTE』194802）。知識や既成の学問、理論の押し付けへの批判は、啓蒙運動の反省を促す重要な論点であったが、問題は日本の「文化人一般」の精神性と知識のあり方の再検討であり、そもそも民衆との距離を縮めることという実践を通じてのみ、その検討が可能かどうかについても議論を深めるべきであった。

1949年末になると福田恒存が「知識階級の敗退」において、平和運動に関わる知識階級の精神性を批判していた。福田は、「精神の自律性」という観念を足場とする知識階級が、「知識階級の一般大衆からの分離」と「精神と肉体との乖離」の問題を招来させている状況を見て取り、「日本の知識階級くらゐ不幸でみじめな人間はありません」と論じた⁷。

精神や知識と肉体、生活との乖離のような問題は戦後の知識人論の主題の一つであった。ここで丸山眞男に目を向ければ、いわゆる政治と文化をいかに媒介するかという問いの中であって丸山は、近代的な自由の価値を認める「ヒューマニズム」擁護の立場には近接しつつも、微妙な距離感を感じていた。青年文化会議の同人であり、世代も丸山と近い政治学者の中村哲が『知識階級の政治的立場』（194801）を発表した際に丸山は書評を執筆している。中村が「文化至上主義的思潮をいくらかでも社会革命の側にひきつける」ためには「ヒューマニズム」

が必要であり、他方では「[ヒューマニズム]の実現のためには現代に於いては社会主義以外に途はない」と主張したことに着目している。丸山は中村の立場を、「現代の進歩的を以て任ずるインテリゲンチヤの論理のなかに多かれ少かれ潜む二重性のいつわらぬ表現」としながら、「ヒューマニズムはある時には戦術となるかと思うと、他の時には目的」となっており、これでは「ヒューマニズムといわれるものの弱点」を中村が自覚するのも無理はないと述べている（『中村哲『知識階級の政治的立場』19480219）⁸。政治運動の戦術かそれ自体の目的かの二者択一を、刻々の状況に応じて変化させるような弱い「ヒューマニズム」ではなく、丸山が深めようとしたものは進歩的を以て任ずる知識人の「インテリジェンス」のあり方であった。

1948年の丸山は「インテリゲンチヤ」について、「インテリジェンス」に注目する立場から意見を述べている。「民主主義が少しも生きた生活原理として、人々の生活の中に浸透してこない」という問題を指摘する際に、「人間はインテリゲンチヤが考えるほど理性的な動物ではありません」として、「インテリゲンチヤ自身ですら、純粹に理性的な判断によって行動する場合は、人間の全行動の中で、実にわずかな部分しか占めて」いないと述べている（『二つの青年層』194804）。また同人誌『未来』においては、「はっきりした目的意識を以てザインとゾルレンを結びつけている様に見える組織大衆乃至は進歩的インテリゲンチヤ」は、「進歩陣營の思想」の「せいぜい結論だけ」を受け取るのみで、結論に至るまでの「論理過程」が肉体化していないと指摘している（『車中の時局談義』194812）。同じく『未来』の同人座談会では、現実に「インテリ」と言われている者と、「ほんとの意味でインテリジェンスを尊び、それを目指す人間」とを分け、後者の立場から「所謂「インテリ」性」を克服できると主張している。「口先でインテリを批判し、「人民の中へ」などと軽々しくいう気持の底にあるインテリ根性」は「最も軽蔑すべき」としている（『未来』「芸術・民衆・知識階級」194807）。

丸山は、政治運動の指導者となるような「政治型人間」は「抽象的イデオロギーの化物」となりがちだし、その一方では政治からは距離を取る「内面性の確立」が、運動や外部への働きかけから切り離されていることを問題とした。「本当の近代社会のモラルは」、「他に働きかけることによって、自分自身を変革」できること、「外に対して闘争するということは、同時に自己自身への闘争」であり、「自己批判」をしなければならないと主張していた（『二つの青年層』194804）。軽々しく「人民の中へ」を言うインテリ根性は、外部への働きかけと内面性の確

立を統一するような自己批判的な心構えによって克服されねばならなかった。

インテリジェンスを尊ぶことに関しては、1949年12月の高見順との対談でも主張していた。「インテリジェンスというものは、「立場に拘束されつつ立場を超えたもの」をもつところに積極的な意味があり、そうした「知性の次元の独自の意味が認められてはじめて」、「共産主義を含めた思想・学問の自由を一致して守りぬぐための知識人の結集が可能になる」と述べていた。丸山は、占領政策の転換を契機とした思想の自由の危機の時期において、「インテリゲンチヤの相互の間でもっと結束して」行くにあたり、立場を超えた協力体制を生み出すインテリジェンスの役割を説いた。「インテリゲンチヤは無力だというけれども、無力というより本当のインテリゲンチヤがない」こと、「インテリゲンチヤが社会的に働く場合に」、「インテリゲンチヤの看板を卸してしまつて何かほかの社会人に」なつてしまえば、「無力になるのは当たり前」だし、「インテリゲンチヤ無力論というのが、ますますインテリゲンチヤに敗北感情を」起こしていると述べた（『インテリゲンチヤと歴史的立場』194912）。こうした丸山の言うところの「インテリジェンス」についての立ち入った検討は、第4章で行うこととする。

丸山は、知識人が無力であると言われることには違和感を抱いていたが、知識人には知識人特有の弱さがあることは、平和問題をめぐる議論を通じて自覚していた。1950年4月29日に行われた座談会において、中島健蔵は「学者や文学者の団結も無意味ではない。しかし、それだけでは弱い」、「文学者とか学者とかいうものが社会的活動をする時に、その活動が何かの実際的な意味を持つためには、自分自身の発言をあまり過大評価してはいかんということです」と発言した。それに応答して丸山は、「それは同感」であり、「それが戦争を食い止める大きな力」だとは「妄想はしていません」と前置きしつつも、「ああいうことをやると、すぐ、ただ声明を出してもしようがないじゃないか、現実的には何ら力のない声明を出していい気になっているだけだ、こういう嘲笑というか、単なるシニカルな嘲笑が、一般の新聞、とくに反動的な側から非常に浴びせられています」と述べていた。丸山にとっての問題は、「そんなことはただの理想で現実的じゃないという言い方」を好む日本人一般の傾向であり、「現実的現実的ということによって、既成事実にどんどん屈服」していくことであった。そのため「むしろ理想とかイデーとかの力をもっともっと強調」すべきであるとし、「それがあつた場合は正しい意味でもっとも現実的な効果」を持つと主張した（『平和の問題と文学』

『文学』195008)。

また1952年の丸山は「『現実』主義の陥穽」の中で現実への屈服の問題を「知識人特有の弱点」として言及している。「知識人の場合はなまじ理論を持っているだけに、しばしば自己の意図に副わない『現実』の進展に対しても、いつの間にかこれを合理化し正当化する理窟をこしらえあげて良心を満足させてしまう」。さらに「本来気の弱い知識人は」、「自分の立場と既成事実との間の緊張関係」に堪えきれず、「お手のものの思想や学問が動員され」、「自分の側からの歩み寄り」でその緊張関係を埋めようとしてしまうという。先の大戦に至る政策を合理化してきた「嘗ての自由主義ないし進歩的知識人」への反省の念がここで表明されている(『「現実」主義の陥穽』195205)。

1950年前後の丸山は、丸山なりの論じ方で知識人の弱点を衝きながら、「人民の中へ!」と軽々しく口にするのではない仕方で、「立場に拘束されつつ立場を超えたもの」をもつところに積極的な意味があるインテリジェンスを発揮する知識人に期待し、「理想とかイデー」を現実的な力にすべきことを主張した。しかしこうした主張がインテリゲンチヤを無力とすることへの効果的な応答と、知性をめぐる議論の呼び水になったとは言い難い。「進歩的文化人」に対する批判という、新たな知識人批判の論調が生まれていく時期はこの後であった。それへの応答の中で、知識人論がいかに形成されていくかについては次章で検討したい。

2. 「進歩的文化人」批判

第1章で見てきたように、1950年前後の占領期後半にはすでに、平和運動にかかわる知識人への批判が生じていた。1950年代半ばになると、「進歩的文化人」という呼称が、「知識人」、「文化人」、「インテリ」への批判的論調と共に普及していく。

この時期は1955年7月の六全協、1956年2月のスターリン批判以後、ソ連共産主義圏と日本のマルクス主義の権威が揺らいでいく時期であるが、マルクス主義の変動とは別の問題として知識人論は様々な論点の展開を見せていた。

『図書新聞』1955年6月11日号では「特集・日本の知識人」が組まれた。巻頭論文で上原専禄は、知識人は「大学教授、学校教師、研究所の研究員、医者、作家、芸術家、新聞記者など」の職業によって知識人となるのではなく、「与えられた生活現実を歴史的問題状況として知性で受け止め」、「知識人としての社会的実践」をなすときに知識人と呼ぶことができるとした。またそれは、「他

の知識人との、労働者階級との、国民大衆との結合」を通してなされなければならないと説いていた⁹。上原の規定する社会的実践を営む知識人論が提起した、「社会的実践」、「知識人と大衆」という論点は終戦直後から継続的に議論されていたものであり、目新しさはないという印象を受ける。しかし、当時の知識人論は「進歩的文化人」への批判という、この時期の新しい論調による影響を受ける中で新しい展開を見せていた。

1956年12月25日の朝日新聞では、当時の流行語として「進歩的文化人」が取り上げられており、福田恒存による解説を掲載している。「進歩的」とは「人間の生きかたを進歩の観点からだけしかみない人たち」、「進歩のためには自由も才能も自我の尊厳も人間の幸福も犠牲に」することを指し、「文化人」とは、「知的指導」ということが商品となること、「自分だけが文化の担い手であると思込んでいる人たち」だという。「進歩的」も「文化人」も「揶揄」に過ぎないため、その「痛快な語調」から離れて用いるべき言葉ではないという。

読売新聞では亀井勝一郎「進歩的文化人の今昔」が初期の用例であり、福田のいう「揶揄」的な表現を見ることができる。「自分の財産を投出したり地位を棒にふって、一つの思想と対決しようというインテリは今ではないのではないか。口先では大いに進歩的な言論を吐きながら実生活ではぬくぬくとした小市民生活をたのしみ、電気冷蔵庫に長時間レコード、夜は酒場で上等のウイスキーにアメリカ煙草を吸いながら、共産党とまではゆかなくても社会党左派の気炎をあげるのが進歩的文化人の現状ではあるまいか」(『読売新聞』19540913)。

こうして「進歩的文化人」が新聞上で取り上げられ、流行し始めた頃に執筆されたと思われる丸山の草稿メモがある。「ちかごろいわゆる『進歩的文化人』に対する攻撃というより征伐が新聞雑誌でますます熾んである。[…][進歩的文化人]や平和運動家の戦争中の言動と現在のそれとの矛盾をとりあげて、こういう風のまにまに動く連中のいうことはあてにならないともって来るのが定石のようだ」(東京女子大学丸山眞男文庫資料【449-2】「日本の思想」関係断片 進歩的文化人関係)。このメモで丸山は、「数年前には」、「『思想』編集部の人君にひとつ『進歩的文化人七つの大罪』というのを書こうか、などと冗談口をとばした覚えがあるが、昨今のようにあっちでもこっちでも流行しだすと首をかしげずにはいられない」と記している。

丸山は1953年12月の『思想』誌上の「思想の言葉」において、左派や進歩派の「政治的ナリアリズム」の欠如を指摘し「進歩派」への疑問を述べていると同時に、「新聞ジャーナリズムや、一部の知識人」の傾向として、問

題や事件に対する「当否や賛否の実質的な判断」よりも、他人のその問題への反応や態度をまず頭に置きながら問題への「価値判断」を形成するような、「御殿女中や井戸端会議」的な行動様式が見られると指摘していた（『進歩派』の政治感覚）195312）。

草稿メモの中でも、戦中期の時局便乗的な発言を暴露する「進歩的文化人」批判が流行していることについて、丸山は「思想や態度の一貫性などといったって、実は自分の根づよい偏見に対する無反省にすぎない場合もあるし、頭の動脈が硬化して状況からの新たな挑戦に対して不感症になっているのが結構バックボーンがあるらしく見えるものだから、病理現象をとり出してくれば何も進歩派には限らない」として、「そういう病理現象があたかも「進歩的文化人」だけの属性のように見える、もしくは強いてそう見ようとする、「眼」が問題なのだ」と記している。「結局「左」がかって見えるものは何でもケチをつけるという政治的意図」が広がり、「思想や立場についての内容的な批判」や「事象自体の当否」ではなく、「それに携わる人の恰好とか雰囲気とかの面にすりかえ」るような、「井戸端会議的批評」が発生していると危惧を表明していた。「大抵自分は平土間にねそべっていて、なまじ立ったり飛んだりしたために姿勢がくずれた知識人の足をすくってよるこんでいるだけ」であり、その無責任な性格を読み取っていた（前掲、丸山眞男文庫資料【449-2】）。

さらに同時期のメモと推定される、「匿名批評のルールについて」でも同様の指摘がある。新聞雑誌の匿名批評の場で、日本の平和論者の「人格、生き方、行動様式」が問題にされるにもかかわらず、「批判者自身の生き方」がまったく問われなまま、「平和運動者にケチをつけるというだけの目的をもった御殿女中の的な批判」が生じていることを「批評の病理現象」と記していた（『丸山眞男集別集』2、60-62頁、丸山文庫資料【107-44】）。

丸山は平和問題談話会での言論活動のほか、1953年7

月上旬には内灘の基地反対闘争に入り、県主催の「一日労働者大学」の講師を引き受けている¹⁰。平和運動に関与する「進歩的文化人」を揶揄し、それでいて批判者自身の生き方は全く問わない、井戸端会議的で無責任な批評に対する丸山の批判は、丸山自身の平和運動に積極的にコミットした経験に由来していた。

当時の「進歩的文化人」批判を丸山が井戸端会議的としたように、福田恒存の「平和論の進め方についての疑問」（『中央公論』195412）にも、平和問題の事象の当否よりも平和論者の人格を批判した箇所があった。福田によれば「文化人」は「何事につけてもつねに意見を用意してゐて、問はれるままに、時には問はれぬうちに、うかうかといひ気になってそれを口にする人種」である¹¹。また、平和論者というものは「平和、平和と氣勢をあげ」るだけで、「平和論水泡に帰す、あとのことは知らぬ」という態度になりがちだとしていた¹²。

「進歩的文化人」批判の流行についての丸山の懸念は、知識人が共通の文化基盤で結ばれた層がないことという1957年の「思想のあり方について」で展開された「タコツボ」型社会への批判に結びついていったと考えられる。丸山は石川達三が日本の知識人のもつ言論の自由は「酒を飲んでクダを」まくような自由だと述べたことを（「世界は変わった」『朝日新聞』19560711-15）取り上げた上で、「新聞の匿名欄」でいわれる知識人と、石川が批判する日本の知識人のイメージが大きくかけ離れていることに注目する。知識人を攻撃するときに「めいめい日頃自分の周囲に見聞する眼ざわりなインテリ」を、「普遍化して」、「日本のインテリ」はとって批判することは、「共通のカルチュアで結ばれたインテリ層というもの」が存在しないタコツボ型社会の反映だという（「思想のあり方について」195709）。しかし、1950年代半ばの丸山の知識人論と、「進歩的文化人」批判から受けた影響との関連については、さらなる検討の余地がある。これについては、第4章でもう一度立ち返る。



楳文とカンパ者の一覧表が貼られている診療所内で議論する丸山眞男（中央）、筆者（左）、森直弘氏（右）



村民の座り込む浜小屋の前に立つ丸山眞男

両画像ともに『丸山眞男手帖 29』2004年4月、丸山眞男手帖の会編より転載

丸山と共に平和問題談話会の一員であった久野収は「進歩的文化人」批判の問題提起をうけ、「文化人と民衆の断絶」の問題へと論点を展開させていた。「福田氏の所論は一つもつともな糾弾である。社会問題に意見を出したり、ものを書いたりする場合、「自分の責任を十分考え、発言や意見を具体的行動」として提起しなければ「文化人の信用が失墜するのは当然」であるという。そのうえで久野は、福田の問題提起を「鶴見俊輔君がたびたび指摘しているように」、「専門家としての文化人と生活者としての民衆との」、「大きな断絶」の問題として受け止める。「文化人がジャーナリズムを介して民衆の質問に答え」る時、「文化人は、民衆の質問に対して、せまい一定の専門家の立場」から答え、「抽象的説明」に終始し、「民衆の問題をどこかへ蒸発させてしまう」ことが問題だという。「インテリとしては、専門の知識をあくまで生かしながら、問題に人間的に答える訓練をつまなければならない」（『文化人と民衆の断絶』『読売新聞』19541118）。

久野収は「専門の知識」の担い手であるインテリが、民衆の問題に「人間的に答える」ことによって、民衆へ接近することを説いた。これに対して1956年の鶴見俊輔は「自分で考え、自分の考えによって暮らし、はたらく」人を「新しいインテリ」としていた。それまでの「文筆業者」インテリが「大衆に対して呼びかけるというのではなく」、「生活者のサークルと結びつき」、新しいインテリへと「転生」すべきことを論じていた（『新しい知識人の誕生』『知性』195603）。1950年代後半期になると、それまでに活発化していた労働者サークル運動によって、勤労大衆の中から評論やエッセイの書き手となる人が誕生した。鶴見は「自分で考え」生活するという習慣の有無という視点から既存のインテリ・非インテリ区分の再検討を試みていた。

民衆と知識人の断絶という終戦直後以来の問題が、特に平和運動に関わる進歩的文化人批判が契機となり持続していく一方で、もう一つの難問が生じていた。それは「進歩的文化人」と戦争責任という問題であった。丸山も注目していたように、平和運動に関わる「進歩的文化人」の戦争中の言動と現在のそれとの矛盾を取り上げ、変節や無節操を非難する論調が提起した戦争責任は、知識人にとって避けられない問題であった。

3. 知識人の戦争責任

鶴見俊輔は、久野収同様に同時期に進歩的文化人批判を受け止め、知識人の戦争責任という知識人論の新しい論点を展開していた。1957年3月に丸山が『現代政治の

思想と行動』下巻の「後記」において「一昨年の暮れから昨年のはじめにかけて、知識人と戦争責任という問題が論壇であらためて提起されはじめた」と論じている通り、鶴見俊輔「知識人の戦争責任」（『中央公論』195601）、大熊信行「未決の戦争責任」（『中央公論』195603）、丸山「戦争責任論の盲点」（『思想』195603）、戦争責任についての思想の科学研究会での討論（19560714）が同時期に発表されている。丸山は「知識人だけでなく、日本の政界やジャーナリズム、はては学界にひろく蔓延している自分の言動に対する無責任さ、昨日言ったことは今日翻して平然としている風景」に物足りなさを感じている立場からこの問題に関心を抱いていた。また戦争責任の問題を「蒸し返さねばならなくなったこと自体に対して、すべての知識人が深い反省を要求されて」おり、その意味で「戦争責任問題は戦後責任問題と切り離しては提起されない」と考えていた。

大熊信行「未決の戦争責任」では、こうした進歩的文化人の戦争責任を喚起した3冊に、全貌社の『進歩的文化人——学者先生戦前戦後言質集』（195403）、本多顯彰『指導者』（195510）、長尾和郎『戦争屋——あのころの知識人の映像』（195512）を「正しい目的を持っているとは思われない」、「単なる暴露物」だとして取り上げている。

長尾和郎『戦争屋』の終章では「知識人の戦争責任——鶴見俊輔君に寄せて」が載せられている。ここで長尾は、知識人の戦争責任とは「今日の言論界で「反戦運動として」思想史上に評価されているものの再検討」、つまり「二十代の青年を自分のベースにまきこんで、とくどくとしている偽善的知識人の仮面をはぐこと」であり、それは「平和運動のチャンピオンたちに向けられる裁き」であるという。しかし、鶴見の考える知識人の戦争責任の問題提起は、長尾のこのような「裁き」とは異なる次元で知識人に対して反省を促すものであった。

鶴見は「知識人の戦争責任」の執筆にあたって、猪狩正男のエッセイ「烈しい怒りをこめて」（『コチレドン』東北大学農学部翠生会、19550325）に影響を受けた。猪狩のエッセイは「大衆から完全に浮き上がり、しかも見放され警戒されている」、再軍備反対や平和を説く知識人が、「選ばれた人と云う意識で壇上から理想社会論を叫んだり」、「口を開けば飛び出して来る人並以上の立派な言葉」では自由や平和は守られないことを厳しく批判するものであった。鶴見は猪狩のような、二十代後半の青年を「この世代だけが、戦前世代、戦後世代の双方の同時代人として、両方にたいして伝え」られる「特別の真実」があるとしていた。それは「日本の知識人が戦前戦後にわたってもちつづけている脆さ」とその脆さを隠すべく身につける「特権階級的な英雄意識」であった。

鶴見は、知識人が「過去に自分が抵抗しなかったという事実」を告白し、「過去現在にわたってうわすべりの言論で卑怯さをぬりつぶして英雄的に民衆にのぞんできた事情」を反省し、「民衆が平和運動に参加するときに必要とする実際の勇気を知識人もまた同様に身につける」ことを主張した。これを鶴見は「実践倫理の問題」として戦争責任をとらえることだと述べる。戦後の「進歩的知識人」の「インチキ」は、「被圧迫者の代表として」、「圧迫者階級に対して」、「カレツなる戦争責任追及」をすることで、「被圧迫者大衆の中に自分たちを無差別にくるみこんで」しまったことにあるという。そのように時局に便乗した自己を戦後の「環境の刻々の変化に適応」させることのできる「有能さ」という能力に反して、資本主義下の条件下では「大局的な目標に対するかわらざる献身」の能力としての「節操」をより重視すると表明した。それゆえ、獄中非転向を貫いた日本共産党の立場の重要性を承認しながら、社会行動のための合議の場を作っていくべきとしていた。

知識人は「文字をしっかりともつ集団」として、「自分の判断をはっきり（活字にできなければ口で）ということが、知識人の本来の実際の義務」であり、戦争責任に関わるという。鶴見の「実践倫理」は、大局的な目標を持続的に追及する「節操」の能力を重視して、戦後知識人を平和に向けた行動に直結させる、戦争責任の自覚であった（「知識人の戦争責任」195601）。

猪狩のような若い世代から知識人批判の問いを受け取った鶴見であったが、1957年の「自由主義者の試金石」では、戦争責任論が転向論と結びつく際に、「転向者は駄目だ、ひっこんでくれ、これからは若い新しい者で、という純粋主義」が生まれることを拒否していた。「外国製のイデオロギー」に依拠した「学習本位」、「学生本位の急進主義」ではなく、「自他の転向についての徹底的な自覚の上に新しい一貫性」、「新しい土着的な非転向の伝統」をつくる方向を目指していた。この文中で鶴見は1957年4月9日の東京新聞に掲載された進歩的文化人批判の一節——「入党はしないが、党員あるいは党員以上の影響を与え実績をあげて、学生の人気をとり、原稿や講演の実入りをよくする。もし入党していたら、党にしばられ、学校当局や世間から警戒されてソロバンがあわなくなる。ここに彼らの商売上手なチャッカリ性があるというわけだ」——を取り上げている。これを鶴見は、処世術としての「進歩的文化人のずるさ」とするよりも、「ちがった価値体系を信じるものとの合作」を作り、「リベラルの思想活動領域」、「実践活動領域」を困難にするものとして、進歩的文化人の弱さを読み取ろうとしていた（「自由主義者の試金石」195706）。

鶴見にとって進歩的文化人批判、転向、戦争責任の問題は、「実践倫理」と述べていたように、倫理的な自己への問いを行動に直結させることであった。自他の「転向」についての徹底的な自覚は、進歩的文化人の弱さを克服することにつながっていた¹³。1959年1月発表の「戦争責任の問題」で鶴見は、進歩的文化人批判に色濃い性格としてあった世代的批判を超えた戦争責任論を提唱する。「戦争責任の意識を高める方法として、私の考えているのは、長尾和郎の方法とは反対に、なるべく同世代のものむすびつけをさけ、ちがう世代、ちがう社会分野のもの結びつきをとおして、戦争についての体験のちがいをくらべあいながら、それらをつらぬく共通の戦争責任の意識に近づく努力をくりかえす」ことだという。「ディスコミュニケーションの条件」を絶えずつくっては、コミュニケーションを試みることを主張していた。

世代も、社会分野もちがう者同士のコミュニケーションの場としては、思想の科学研究会におけるサークル運動があり、鶴見はこれと転向研究において、戦後日本の思想状況をとらえようとしていた。これを鶴見は「たての糸としての転向、よこの糸としての小集団（あるいはサークル）」と表現している（「戦後日本の思想状況」195711）。世代と分野を超えた鶴見のサークル運動構想は、「前衛的な知識人と大衆の関係」を超え、「既存のあらゆる集団を包摂するもの」と理解されている¹⁴。「文筆業者」のようなインテリが「生活者インテリのサークルと結びつく」ことで、新しい知識人へと「転生」し（前掲、「新しい知識人の誕生」）、さらに戦争責任についての議論も多様な世代・分野間のコミュニケーションにより深められていく。この過程の中で進歩的文化人の弱さの克服を目指していた。鶴見にとって進歩的文化人の弱さとは、時局の変化に応じて巧みに変節しながら、「被圧迫者の代表」としてふるまい、立派な言葉や理想社会論を叫ぶ知識人の「有能さ」、あるいは自身の転向についての徹底的な自覚の欠如であり、世代や分野の近いもの同士のみで語られる思想や戦争体験の現状でもあった。こうした問いは、鶴見が進歩的文化人への批判から影響を受けながら発展させてきたものであった。

以下においては章を改め、丸山が戦争責任の問題を知識人論の文脈でいかに受け取っていたかを見ていく。

4. 知識人の思想と良識

1956年3月、「戦争責任論の盲点」で丸山は「知識人の、とくに「進歩的」なそれへの責任だけをあげつらう」のではなく、「あらゆる階層、あらゆるグループについて、

いま一度それらについていかなる意味と程度において戦争責任が帰属されるか」の検討を求めており、「政治的エリット」に比べれば、「知識人が知識人として」、「負う戦争責任などは現実の役割において問題にならぬ」と述べていた。ここだけに着目すれば丸山は、鶴見俊輔と比較すれば、戦争責任論からの知識人への問いかけが弱かったようにも見える。しかし、丸山は独自の方向から、戦争責任論が喚起した知識人への問いを深めていた。

鶴見は戦争責任を問う時に平和運動やサークル運動における世代・分野間のコミュニケーションのような、実践に関わる上での自らの倫理的側面を強調したが、思想の科学研究会1956年度総会(19560714)にて行われた「戦争責任について」の討議において、竹内好と丸山と鶴見はそれぞれ戦争責任を問うことの意味について異なる意見を述べている。鶴見は「自主的に考え、判断して、こう思う」という「思想家」の「職業の尊厳」の意味を信じ、見つけるという意見、さらに岸信介を挙げながら「戦争責任という概念」を用いて、「権力場から降りて貫くことを強制しなければならない」という意見を述べている。鶴見にとって戦争責任問題は、思想家として「転向」研究に向き合う自己に対する意味づけと、それに直結する国内政治への働きかけを両方含むものであった。それに対して竹内と丸山は、次のように述べている。

竹内好「戦争責任は究極には個人の責任、したがって道徳責任に帰着する——あるいはそれが出発点になると思う。[……] 次の戦争を避けるという大義名分より、むしろ今日の自分の生きる立場を固めたいという気持ちが強い。したがって、個人というより、自分の問題として、それを追及していきたい¹⁵⁾」

丸山「自分のインタレストだけでやるということは無理で、鶴見さんもそういう方向でやってゆくのも一つだけれども、インテリ一人の立場で考えてみると日本のインテリゲンチヤを考えないといけないと思うんです。一人の思想をもったインテリゲンチヤがどう生きるかということで考えてゆきたいと思います¹⁶⁾」

竹内と丸山は、1950年代初頭から知識人論については似たような問題関心を持っていた。竹内好『日本イデオロギー』の書評(「竹内好『日本イデオロギー』」195209)において丸山は、竹内が「インテリが民衆から孤立しているのは、かれがまだインテリになり切っていない」から(「インテリと民衆の結びつき」(『日本の思想国民講座Ⅰ』1951年、河出書房))と述べたことを引用

し、「どこまでも新たな思考次元を設定する」(傍点丸山)試みであり、「通常の「庶民主義者」から区別する特質がある」と評価していた。

第1章で見たように「人民の中へ!」という言葉が軽々しく口にされるばかりでは、本当のインテリジェンスやインテリが育たないと考えていた丸山は、「進歩的文化人」批判が流行した際には、「めいめい日頃自分の周囲に見聞する眼ざわりなインテリ」を、「普遍化して」、「日本のインテリ」はとって批判するだけの、共通のカルチュアで結ばれた知識層の欠如=タコソボ社会の病理や井戸端会議的批評の弱さを指摘した(前掲、「思想のあり方について」195709)。さらに、草稿メモの末尾では、「ジャーナリストももし「平衡感覚」を以て自ら任ずるならさしずめ「進歩派」に代って急速に騰貴した「良識」株の内実にメスをあてたらどんなものだろう」と記していた(丸山眞男文庫、前掲資料【449-2】)。

「良識」について丸山は共同研究「転向」における討論の場でも問題にしていた。転向問題においては、「かつて左翼であって、戦争中便乗して、戦後また非常に民主的になったという人」は叩かれるのに、「もともと左翼ではなかった」、「いわゆる良識的文化人」、「良識人」は転向として意識されないと述べていた(「現代世界と転向」19590510)。

同時期の『文芸春秋』1958年12月号では、竹山道雄と林健太郎の対談「良識は反動ではない——いわゆる進歩的平和屋にもの申す」が組まれている。もともと竹山は「軍国主義とファシズムをダカツの如く嫌う自由主義者であり、ヒューマニスト」であると考えられていたが、「1950年前後に」、「はた目にもとりみだした反共ヒステリイ」に変節したと評されていた(佐々木基一「知識人の反動化」『群像』195509)。対談は、ソ連コμμニズムに対し「人間のヒューマニスティックな感情を利用」する性格を見て、両者に共通の政治的立場からソ連コμμニズムと日本のマルクス主義者のソ連信奉を批判する調子で終始進められている。林は「日本のインテリの考え方一番欠点は簡単な一元論」として「何か一つの立派な原理があるとそれだけで何でも解釈」するような傾向や、「革命々々と言う」、「合言葉みたいなものだけで」労働運動を進める傾向を批判している。竹山は、敗戦直後は「落ち着いたバランスのある客観的な考え方は出来なかった。むつかしい現実を安直に割り切るということをしなくて、いやなことでも事実を事実として認めて、正確な論理で追及していくというようなことはしなかった」、それゆえ「そろそろ正気になって物を考えようじゃありませんか」と主張している。ソ連コμμニズムへの批判と「進歩的平和屋」と呼称される人々に対し、

コミュニズムの原理に拘泥はしないが反動的でもない、竹山の言う「落ち着いたバランスのある客観的な考え方」が「良識」なるものとされていた。また同時期に社会学者の北川隆吉は、「現在われわれは「良識」という名でよばれる専門閉塞的な意見や、いわゆる批評家的ミニカルな「どっちもどっち」的意見に疑問と、不満」を感じていると述べている（北川隆吉「良識と知識」『新日本文学』195812）¹⁷。

こうした「良識」と日本のインテリの問題について、丸山が体系的に論じたものとして「思想と政治」（195708）を挙げることができる。「思想と政治」は、日本における近代以来の思想が「非常に狭いアカデミーの社会」のみで通用し、「単にアクセサリーとして、お化粧的な教養」でしかなかったこと、さらに思想といえば「アカの思想」だとして、危険思想への「アレルギー的症狀」が発生してきた傾向を、日本における思想のあり方の問題として指摘するところから始まる。

丸山は、「政治自身がわれわれの内面の思想の問題に対して深く立ち入ってくる傾向」が世界的に出ている現代においては、「われわれの全存在というものを、政治にのみつくされないように」、「われわれ自身が思想を明確に身につける」こと、「いろいろな政治を弁別する」こと、「自分の思想の政治的役割というものに盲目にならない」ことが必要だとする。思想と外部の世界との緊張やつながりを保ち、物事を関連的に文脈的に考え、政治判断を下すことに対して、丸山が危惧するものは、思想やイデオロギーを排して「常識」や「良識」から政治について「いいとか、けしからぬ」の判断を下す、「是々非々主義」である。

丸山のいう「ほんとうに思想する」ことは、政治判断と直結しているがゆえに、「自分の思想に対して責任を持ち」、「一定の立場に積極的にコミット」し、「賭ける」こととなる。一定の立場へのコミットを回避しながら、思想を紹介し解説する風習があまりに長く続いたがために、日本には「アクセサリー」的な教養や知識が支配的となった。この一定の立場へのコミットの回避が、ジャーナリズム上で「政治的中立」とされ、「良識として通用し」、尊重されていることを丸山は問題視していた。そのうえで、丸山は「良識」のあり方について次のように述べた。

私は良識ということは、物事を距離をおいて見るということだと思います。物事を距離をおいて見るということは、傍観するということと違います。〔…〕つまり物事に対してコミットしない無責任な態度、自分自身を無責任な地位におくのが傍観です。だか

ら、自分もつばら批判する側になつて、決して対象の中には入らない。こういう良識派をもって任ずる人は、実は自己自身を隔離しておらない。自分自身をも距離をおいて見てないという点では、むしろ良識を裏切っている。〔…〕距離をおいてみるというのは、自分自身をも隔離する精神です。そうして自分自身を隔離するということは、現代のようなすべての物事の中に政治が入ってくる時代におきましては、自分の言論や行動というものが、不可避免的に政治の一定の方向に対してコミットする意味をもつことを、自分で自覚するということでもあります。自分の言論が好むと好まざるとにかかわらず、党派性をもっているということを知覚すること。党派性をもっているということを知覚しながら、党派的認識のかたよりを吟味していく——これが私は現代における良識というものの唯一のあり方だと思う。

丸山がここで「良識」の意味を、政治的立場へのコミットを避けた傍観者とは異なる、自分自身をも隔離する精神として論じたのは、平和運動に関わる知識人を揶揄する良識派の「進歩的文化人批判」に見られた、無責任でみずから客観的で非政治的な立場におくような批評を受けてのものだと考えられる。

これ以前には、「立場に拘束されつつ立場を超えたものを」もつことを、本当のインテリジェンス（「インテリゲンチヤと歴史的立場」194912）と呼んでいたことは第1章で述べた。ここでさらに丸山の知性論に立ち入った検討を加えれば、「党派性」を「自覚しながら、党派的認識のかたよりを吟味」する態度を丸山が要求したとき、マンハイムのいう「存在拘束性」と「自由に浮動する知識層」の知性が丸山の念頭に置かれていたのではないか。

『自己内対話』所収の「日記」で丸山は1951年に次のようなメモを残している。また晩年の丸山はこのメモを見ながら、マンハイムについて論じていた。

認識の対象への参与

すべての認識が対象に参与しているかぎり、そこには真理がある。その真理は絶対で（あって）相対的ではない。ただ、対象の全構造を一ぺんに把握するような認識は現実には存在しないから、現実の認識は部分的真理たるを免れないだけだ。部分的と相対的とを混同してはならない。混同すると相対主義に陥る。あらゆる認識の社会的制約性は、経験的真理の相対性ではなく、ただ部分性を示すにすぎない（傍点丸山）

党派性の問題

ある特殊のグループから喝采を博しようという心秘かな願望、「言葉」による自慰への衝動——そうしたもののへの屈伏が、いかに屢々「党派性」という便利なスローガンでごまかされ、隠蔽されていることか。「人民」との無雑作な同一化！¹⁸

「対象の全構造を一ぺんに把握するような認識は現実には存在しない」と言っているのは、マルクス主義者の党派性を批判したものだだろう。『丸山眞男回顧談』では、このメモを見ながらマンハイムの「自由に浮動するインテリ」について言及している。

マンハイムは相関主義。〔…〕すべての人は階級的に制約されている。知識人も階級的に制約されるけれども、知識人の本質というのは、自由に浮動することにある。自分の出自の階級を越えて、他の階級の立場を理解できるというのが知識人の特権だと言うのです。ほくはそれは面白いと思うのです〔…〕一生懸命考えたのは、党派性ということなのです。党派性というのは、そんなにプラスだけなのかと。〔…〕ある党派的立場に立てば、全体的真理を認識できるということはないのではないかという疑問です¹⁹

この「自己内対話」のメモは、1951年段階であり、占領期後半の逆コースの下で思想の自由を守るべく知識人が「出来るだけ広汎かつ堅固な連帯」を実現すべきという当時の座談会の発言も考えれば、「党派性」を突破するマンハイムの相関主義は平和運動に集った知識人グループの連帯を探る中で問われていたかもしれない²⁰。

しかし1957年の丸山は、自身の思想やイデオロギーに責任を持ち、政治の一定の立場にコミットしながらも、自分自身の党派的偏重を吟味していく精神によって、傍観者的で非政治的な良識の弱点を解決しなければいけないと考えていた。そのとき再び丸山は「立場に拘束されつつ立場を超えたものをもつ」、マンハイムの「存在被拘束性」的な知性を想起していたのではないか。

結び.

本稿が検討した占領期後半から1950年代半ばにかけて、マルクス主義から距離を置きながら、平和運動に参加した知識人たちは、民衆（大衆）との関係、知識人の戦争責任、「進歩的文化人」批判という問いのなかで知識人論を展開していた。

とりわけ、1954年には新聞と総合雑誌上で流行し始めていた、「進歩的文化人」を揶揄し冷笑するような批判が、知識人論の問い直しの起点となっていた。

鶴見俊輔は、「進歩的文化人」に向けられた批判を受け止めながら「知識人の戦争責任」の問題を発展させた。知識人がみずからの戦争責任と転向を自覚し、内面の倫理的問題を徹底的に問うところから、「進歩的文化人」の弱さを克服しなければならないとした。それは、進歩派と見なされたりベラル左派としての知識人が、主義主張の異なる政党や、世代、分野も異なるサークルに集う人々とのコミュニケーションを通して、より強い抵抗運動を展開していく上での実践倫理に直結していた。

丸山は、鶴見に比べると実践倫理のような側面は少なかったが、日本の知識人の思想文化の弱点に対して、「インテリジェンス」への問いから接近していたところに丸山の知識人論の特徴がある。この問いの起点の一つとなったのは、「進歩的文化人」批判の流行と、政治的中立の表現としての「良識」の問題であった。丸山は戦後3年ほど経過した段階から、知識人の唱える思想が、人々が生活をする中でなかなか肉体化しないと問題提起をしながら、本当の意味での知性（「立場に拘束されつつ立場を超える」インテリジェンス）を説いた。また、その知性への問いは「進歩的文化人批判」が流行するなかで、平和運動にコミットする知識人たちに向けられた傍観者的で無責任な批評態度を見る中で一層深められていく。「ほんとうに思想する」ことは、政治判断と直結しているがゆえに、「一定の立場に積極的にコミット」し、「賭ける」必要がある。そうして自らの党派的な立場の存在拘束性を自覚するマンハイム的な知性を発揮することは、自己自身を隔離し見つめなおす中で、階級、分野、主義主張を超え、自己と他者への相互理解への途を開くことにつながっていた。

今後の課題は、1950年代に出発した丸山、鶴見さらにその他の知識人論と知性論の、時代を進む中での変貌を辿ることである。大衆社会と、高度成長の到来、六〇年安保闘争、新左翼の台頭などを経て、知識人層の基盤が変動していく中で、知識人や知性なるものをめぐる議論が時代に有効たりえたかについての評価が必要である。

さらには時代を進めるだけでなく、本稿では検討できなかった、大学、学問、学者、アカデミズムと民衆、大衆、生活者との関係など、知識人論との関連で改めて目を向けるべきことは多い。職業的に専門家であることに甘んじることなく、知識人として知性の役割を信じながら、その時代の中でどう生きるかを模索し続けた人々のように、戦後思想に内包されている知識人論からの問いかけをさらに読み解いていきたい。

- ¹ 赤澤史朗ほか編『戦後知識人と民衆観』2014年、影書房。
- ² 「知識階級」、「インテリゲンチヤ」、「インテリ」、「知識人」、「知識層」、「文化人」の使い分けについては、本稿では原則的として引用する論説や新聞記事に従いながら各箇所括弧つきで用いることとする。筆者の意図を示す段で知識人一般について論じる際は括弧を外した、知識人を用いるが、本稿が重点的に取り上げる丸山眞男と鶴見俊輔の用例に知識人が多いわけではない。
- ³ 竹内洋『革新幻想の戦後史』2011年、中央公論新社、318頁。
- ⁴ 竹内洋、同上、319-320頁。
- ⁵ 当時の知識人一般の表象について、各時代状況に即しつつ「知識人」「インテリゲンチヤ」「文化人」とは誰を指すのかを明示しなければならない。ここでは本稿が扱う時期の定義の一例を示すこととする。荒正人「現代インテリゲンチヤ論」(『文化評論』1948年7月)は、マルクス主義的な階級論の範疇を用いてインテリゲンチヤの定義が示される一例である。「こんにちの日本に即していへば、インテリゲンチヤとは、小市民を主要な階級的基盤として、上と下に広がっている社会層のことである。職業から言へば、高級官吏、支配人、學者、教授、教師、辯護士、技師、醫者、一般官公吏、會社員、藝術家、文士、ジャーナリスト、学生、事務員、下級官公吏、下級学校教師などがふくまれている」。あるいは1947年12月の吉野源三郎の用例は、知識人という言葉は、文化のつくり手(「学問や芸術に職業的に従事」する人々)と受け手(「専門家の業績や作品を評価し享受」する人々)を区別している。前者は、「大学教授その他諸学科の専門的學者、評論家、作家等を含み、社会学的には、宗教家、医師、法律業の人々と共にいわゆる自由職業の範疇に属している」人々、後者は「高級技術者、会社員、官公吏、教員等いわゆる俸給生活者」、「高等学校、専門学校、大学等の学生諸君」である。後者は「學術的著述や創作に従事」しないが、「高度の文化的要求をもち、専門的學術書や文芸書の広い市場を形成」しており、「知的水準が社会の大多数を成す勞務者や農民に比して高い」ことが、区別の基準となっている(『新潮』1947年12月)。
- ⁶ 本文中における引用資料の刊行年月(日)については、西暦の年四桁、月二桁(日二桁)ずつを略記し、『丸山眞男集』、『丸山眞男座談』、『丸山眞男集別集』、『丸山眞男手帖』、『丸山眞男話文集』所収の著作談話は、初出の題名を付す。『鶴見俊輔著作集』もこれに準じる。
- ⁷ 「知識階級の敗退」『人間』1949年11・12月合併号(『福田恒存全集』第二卷、372頁)。
- ⁸ 「正直にいて、私はいま、ヒューマニズムといわれるもののもつ弱点を持っていることに気がつく。そうしたものに止まっていてよいかどうかは、たんなる思想の上だけでの脱皮と反省とによって決まることではなく、自分の実践的行動——科学者としての行動を含めて——がそれを決定してゆくより他はないと思う」(中村哲『知識階級の政治的立場』1948年1月、小石川書房、323頁)。
- ⁹ 上原専祿「日本の知識人」『図書新聞』1955年6月11日号。
- ¹⁰ 福井恵一「内灘の丸山眞男先生」『丸山眞男手帖29』2004年4月、丸山眞男手帖の会、53-56頁。
- ¹¹ 『福田恒存評論集』第三卷、麗澤大学出版会、2008年、136頁。
- ¹² 同上、155頁。
- ¹³ 赤澤史朗「戦後日本の戦争責任論の動向」(『立命館法学』2000年、第6号)によれば、戦後日本の戦争責任論には、二つの類型がある。一つは「法的政治的責任」を追究する類型であり、これは終戦直後から1954年まで、戦争に対して「唯一手の汚れていない」と自己規定した共産党が持ちえた責任追究の特徴を指す。もう一つが、「内面的倫理的責任論」であり、スターリン批判以後、戦後の共産党の思考方法や戦争責任の追究姿勢が問題視され始めたことを登場の契機とする。赤澤によれば「内面的倫理的責任論」は「責任の問題がより広く事実即して論じられるようになった反面、現実の法的政治的解決にはつながりにくい」という問題があった。本稿はこの「内面的倫理的」な戦争責任論を鶴見俊輔のなかにも読み取り、知識人論の展開過程の中に位置づけ直すことを試みている。
- ¹⁴ 福家崇洋「鶴見俊輔と転向論」(『現代思想』2015年10月臨時増刊号、青土社、101頁)を参照のこと。
- ¹⁵ この一文は、座談会における竹内の発言の整理および補足として、竹内により後日付け加えられたものである(「戦争責任について」『思想の科学会報』1957年3月20日、32頁)。
- ¹⁶ 同上、45頁。
- ¹⁷ 1958年6月4日の『東京大学新聞』では、憲法問題研究会の設立を報じる記事に「良識ある研究者結集」と見出しがつけられている。政府が設けた憲法調査会が「特定の立場からのみ解釈され検討されて」おり、「広汎な民意と正しい良識とを必ずしも代表していないかのようです」と指摘している。また同紙面の時評欄

(「風声波声」)においては「こうした研究会が一流の専門家、学者、知識人を含めてできたことの意味はきわめて大き」く、「“純学問的”“非政治的なもの”」と設立趣旨にあることを捉え、「“純学問的”」であることは守りつつ、「しかし、研究の結果ある一つの結果が出てきた時にはあくまでもそれを貫いてほしい」と望まれている。このように学問的かつ非政治的立場が良識として意識されながらも、それへの批判が表明される場合もあった。

¹⁸ 丸山眞男『自己内対話 3冊のノートから』1998年、みすず書房、36頁。

¹⁹ 松沢弘陽、植手通有編『丸山眞男回顧談』上、2006年、岩波書店、238-240頁。

²⁰ 「例えば思想の自由だとか芸術の自由だとか、そういうものを護るということですね。護るがために、出来るだけ広汎なインテリゲンツィアが結束して行く。[...]せめてインテリゲンツィアの相互の間でもっと結束して行って[...]」(『丸山眞男座談』1巻、岩波書店、295頁)。

Post-War Japanese Intellectual Debate and Criticism of the “Progressive Intellectuals”

Hikaru Shiobara

This paper examines the Japanese post-war “Intellectual-debate” (chishikijin-ron) that had been made by the Japanese intellectuals themselves in the early-post WW II years. The “Intellectual-debate” was the catalyst for an exploration of post-war Japanese democratic thought. The “Intellectual-debate” raised various kinds of discussions about post-war democracy and the Marxist theory of revolution, for instance, the relationship between intellectuals and the common people, distance between the knowledge [culture] and wisdom of living, the struggle between idealism of modernist intellectuals and determinism of Marxist intellectuals.

In this paper, I mainly focus on Maruyama Masao [1914-1996] and Tsurumi Shunsuke’s [1922-2015] approaches to pursuing a genuine change for modern Japanese progressive intellectuals who could not avoid the outbreak of the WW II. The reason why Japanese Intellectuals could not avoid the outbreak of war was self-disengagement from the common-people, preventing them from cooperating in shaping public opinion and therefore stepping-up their criticism of the government. Maruyama and Tsurumi struggled to pursue the role of post-war intellectual as reflective practitioners due to the feelings of responsibility of intellectuals for the war.

The most important questions to be answered in this article is what were Japanese post-war intellectuals looking for in their search for “Intellectual-debate” that would provide value creation for the post-war Japanese society, as well as the equally important consideration of how the war-responsibility debate and the inhospitable climate towards progressive intellectuals fostered an awareness of the need to have an “Intellectual-debate” in the discourse environments of Maruyama and Tsurumi.